

桜前線

小林守城

その時 言葉は無残に断ち切られたが
命の危うき瞬時を裂き
人は生きものの叫びをさけぶ
一瞬立ち止まって身構え
やがてなにものかの命ずるまま
逃げ出そうとすることもできる
我を忘れ愛しい者を守ろうとする

その時 遠くにあつた人たちは
呻きの言葉の言語野をさまよい
すぐわが周辺の無事を顧みては
同じではなかったことの辛さのなかで
救援隊になり募金活動を始めたりする

桜前線は北上し間もなく
陸奥・三陸海岸にもたどり着くだろう
消え去った人や街を素知らぬように
波を逃れた桜は美しく満開になり
それでいい それぞれがその時
何気なく自分をいっばいに咲かせれば

たやすく言葉を紡いでいいのか
消えた桜を咲かせるのは
残されたわたしたちだ
蕾のままの叫びに対生する
意味や文節の秩序をもった
言語野の生け花を咲かせられるか

人はそのようにして数千年
運命と付き合い その記憶の底から
言葉を取り戻してきた
悲しみの深さに応えきるように
不朽の造花を拵えては
人生の限り散花してきた